



| | |
|--------------|---|
| Title | 『狂気な倫理』総評への執筆者からの応答 |
| Author(s) | 小西, 真理子; 高木, 美歩; 貞岡, 美伸 他 |
| Citation | 臨床哲学ニュースレター. 2024, 6, p. 17-26 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/94555 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 第9回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）

テーマ「狂気な倫理：「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定」

『狂気な倫理』の総評に対する執筆者からの応答
(評者：小泉義之)

小西真理子、高木美歩、貞岡美伸、河原梓水、鹿野由行、石田仁、
小田切建太郎、山本由美子、柏崎郁子、北島加奈子、笹谷絵里

1 小西真理子

小泉先生には今回の発表原稿を事前にいただいていたのですが、その原稿を読むことで、この『狂気な倫理』を編集していたなかで感じていたことや、さらには、立命館大学先端総合学術研究科（先端研）で学んだあとで特にこの臨床哲学研究室に所属してその後にいろいろぶつかった壁であったものとかが、いろいろと想起されました。何か応援されているような気持ちになりました。

『狂気な倫理』で「狂気」というテーマを掲げてはいますが、先生がおっしゃるように研究者たちは、「狂気」と言えるもの（されるもの）（自分の立場として）論じている人たちも含めて、まさに「正気」な人間であると言えるかと思います。「正気」さをどこかに有していないと、とてもとても学術論文のような根気を必要とするものを書くことはできないと思っています。私が抱えてきた葛藤の一部を、この原稿で追体験したような気持ちになりました。たとえば、私たちが日常において違和感を経験して、その違和感が何かよくわからないままで語っているものを、研究というものはよくも悪くも変容させていくものだと思っています。これは常に研究を行うなかで感じてきたことです。

このことは、この論文集の編集段階においても突き付けられたことでした。みなさんから原稿をいただきて、それをあえて出版する、公開するという道が決まってきたあたりから、私自身は、混沌としたものを理性側に読めるようにしなければならないという圧を感じてきました。その論集においては、それをしそうな気もしていますが、きっと出版を通じてこそなしえたこと、「正常人から奪った理論という武器の強化」を通じてなしえたこともあったのではないかと、自ら思うようにしているし、思いたいとも思っています。しかし、「武器の強化」に対する「それでいいのか」という問いは残り続けます。それは臨床哲学研究室で現在も問われたり、語りかけられたりすることです。それは、先端研でも、倫理学の学会でも、あまり問われることのなかったことでした。

ただ、かといって、学問の学術的記述のすべてがダメなのかといったら、先端研での日々を思い出すと、そうは思えないです。そうは思えなかったものを何とか残そうとしたものがこの編著だったのかなと思います。では、その先どうなるのか、たとえば当事者の声をその

まま語ることと学問の関係に対しては、申し訳ないのですが、私はいまだに答えが出ていないです。それを記述して、それを公開することによさがあるのかということも、私にはまだわからないです。この著書を編集する意義とか書く意義とか何かあるのかわからない、わからないなかで意味を見出したいと思いながら書いたり編集したりしているという段階なのかなと思います。私のなかでまだまとまっているのですが、そういう状態で学問の領域にいるのが現状です。

同時に、それでも、学問の世界に何らかの救いであったりとか、可能性であったりとかを求めてやってくる人というのは少なからずいると思います。そういう人たちにとって何がもたらされるのかということが、この本の編集と関係していることで、私が一番考えたいことなのかなと思います。

2 河原梓水

私は弁証法的人間をあきらめない、狂人として論文を書く、それしかないと思いました。私は即物的なことしか考えられないので、フーコーの言っていることをまだ全然理解できていないのですが、理性もどこかにあるのではないか、とこの文章を見て思いました。確かに、狂っているどん底のときには作品は書けないかもしれませんけれど、そうではないときもあるので。

今回的小泉先生の総評を受けて、私が今までどのように狂人と対話したかということを考えました。私は本書で論じた古川裕子のようなマゾヒストは、あまり狂人だとは思っていないで、普通の人だと思っています。とはいえ、私にとって SM と狂人というのが切り離されているかというと考えてみると、そんなことはありません。私が SM クラブで働いていたとき、その空間には狂人がたくさんいました。狂人と SM は、当時はよくわかりませんでしたが、今は私の中で深く結びついています。とはいえ私は、なんとなくそのころ、自分もどちらかと言えば狂人だったような気がしています。そして、なんとなくですが、狂人と対話しているうちに、次第に私は「回復」か「寛解」して、今は理性の側になっている、という気がするのです。

狂人は狂人とも対話できないとのことですが、なぜかできたのです。ただ、狂人は、本当に狂っている瞬間には家で寝ていたりしてあまりお店に現れないため、本当に狂っている瞬間に対話・交流したことはほとんどないのだと思います。加えて、そのころの私は大学の授業に出たり、日本古代史の論文を書いたりしていたので、その点では理性を持っています。とくに精神疾患的な症状を自覚していたわけでもありません。なので、狂気といつてもたいしたものではないかもしれません。ただし、私は決して、狂人のなかに入って行って、彼らを近くで観察した正常人というポジションではありませんでした。なぜなら、私はその狂人の中にはあって、決して正常だとは思われておらず、どちらかと言えばかなり「上位」の、相當に頭がおかしい奴と認識されていたからです。このように、私は狂人空間のお客様とい

うよりは、まったくもってその空間の構成要素だったのです。

狂気と理性ほど弁証法的ではないのだろうし、あまり自分でもはっきりと説明はできませんが、狂人と狂人の研究者が対話して、狂気と何かを交換した結果、私は変化したのであり、この変化は「新たな相貌」に至ったと言えるのかもしれませんと感じています。狂人と、狂人の研究者が対話することで、なにがしかの新たな論文が書ける、というふうに考えたいと思っています。それが無理なら、下から彼らを見上げて書く、ということを目指したい、と現段階では考えています。

3 高木美歩

私はASDの診断を受けています。私はこの著書で書いたことは、狂気な話をするつもりはまったくなくて、普通に考えたらこうなるだろうということをこれまでも書いてきました。でも、ASDとか、仲間でいうとADHDの人とか、LDとか、広く言えば知的障害の人たちは、これが正しいと思っているし、これが普通だと思うことをやっているけれど、社会からすると怒られる、狂気であるという扱いを受けるっていうのが共通経験だと思っているんですね。だから、狂気を狙ってやっているのではなくて、普通なことを狂気にされてしまう、どうしたらしいんだろうというところがあります。なので、狂気じやないらしい人が何を言っているかを勉強しているという経緯があるので、この区切り自体がぴんときていないというか。私が正常ですという気持ちがあります。

フーコーの対話のところなんですけれど、発達障害と呼ばれるような人とか、知的障害とか正常性が疑われて対話もしてもらえないということがあるかなということです。なので、弁証法的人間になってほしいということは、ずっと言い続けていたことです。二項対立の理性側の視点なのがなと思うことがあります。ただ、これは運動している側も二項対立を使っているところもあるので、どっこいどっこいかなと思いました。

語りを消費的に読むということについては、属性を持っている本人がそういうものを読むということと、そうでない人が読んで何かを書くということは違うのか、以外と違わないのかということが、個人的にはどうなんだろうと思います。属性を持っている人が、自分と同じ属性を持っている人を求めちゃうということもあって、普通にしていると怒られるけれど、自分は一人じやないという、みんなこういうことがあるんだっていう意味で語りを求めるという、対象化ではない読み方とか書き方になっていくのかなと思います。そういうときは自分も読み書きしているときに、理性的に読みたいと思っているし、書きたいと思っているのですが、どこまで自分ができているのかということは自信がないです。そういうことも併せて考えたいなと思いました。

4 貞岡美伸

私は2003年くらいから代理出産における法的正当性について研究をしておりまして、要するに代理出産を2003年くらいから容認していたわけです。それを学会で発表したときは、最初のころは、いったいあなたは何を言っているんですかという非常に反発を受けたんですね。今になって代理出産の肯定論をみんなの前で説明すると、なんだか受け入れられるとは言えないですけれど、なんとなく理解してもらえるようになってきていると思います。今回、第5章で「生み捨てられる社会」ということで書かせていただきましたけれど、生んだ人と育てる人の分離なんですね。これは要するに代理出産の容認論にもつながっているということで、2003年からの研究の延長を行っています。

今回「生み捨てられる社会へ」ということで、ベーシック・インカムを容認しているということは、本当に今の日本のさまざまな社会保障や制度を映し出すような大きなことを言っているのではないかと考えています。以上です。

5 鹿野由行

私たちの章は、石田さんと私が二人で調査と執筆を行いましたので、私がお話しをした後で、石田さんに話ををしていただこうと思います。

私はもともと大阪のゲイタウンの研究をしていました。その中で、これまで釜ヶ崎の性について話は度々されてきたけれど、特にセクシュアルマイノリティの人たちの歴史が語られてこなかったことに気がつき、その人たちの歴史を明らかにしようと思っていました。なぜ語られてこなかったのか。それは私の心のなかにずっと引っかかっていました。

大阪のマイノリティの性の歴史を研究しようと思ったもう一つの動機として、私自身が当事者として町で遊んでいたことも深く関わっています。自分が働いていた町、飲んで遊んでいた町は、このままでは消えてしまうのではないかと考え、町の歴史をずっと記録したいという気持ちがありました。今回調査に協力していただいた方にお好み焼き屋をやっているひろちゃんという人がいるんですけど、ひろちゃんのことを私自身は狂人とは思っていないんですね。なぜかというと、私自身もその町で遊んでいて、同じ友達のような感覚、同じ水商売を昔していた先輩であり仲間のようなつながりを感じるんです。むしろひろちゃんと私は、時間がちょっと違うだけで同じことをしていたんじゃないかな、そんな感覚がすごく強い。そういう記録をひたすら集めていきたいという思いが一番強かったです。そこらへんからはじまって、書いていった。うまく伝えられているのかはわからないんですけど、それが今回の私の書こうと思っていたことです。

6 石田仁

この本の共著者として選んでくださいって、誠にありがとうございました。私と鹿野さんは

社会学なので、この本とか、小泉先生のお考えを十分に反映しているものではないかもしれませんのが、できる範囲での応答をしようと思っております。

まず、小泉先生の先ほどのご発表のなかでのこちらが感じた要点というのは、研究者が安全な領域にいることに対する自己省察なのかなと思いました。たとえば、狂気と理性という二項対立図式があったときにはそれは理性側が狂気を構築するということと、それからさらに、狂気と理性という二項対立を作っている研究者がさらにもう一段外側の理性を作っているという問題点があるのかなと思いましたので、これは章のなかではなく、本書全体に言えることかもしれませんのが、たとえば、この本が狂気を理解するとか、生を理解するとか、寄り添うとかそういうふうに見えながらも、ある種の見世物小屋的な構成になっているかもしれないという危険性を常に感じておりました。それはたとえば本書が出るときのツイートですとか、あるいはこの本の裏表紙の帯に並べられているトピックみたいなものが、ある種の植民地的な見世物小屋的なものが配置されると思っています。でも、私たちは研究者の立場から描いているんだという何かどこか安全な領域にいる私たちというのが、かすかに自覚をしていたところです。とはいっても、本として、倫理、哲学の本を売るにはこうやらざるを得なかつたのではないかという考え方もあるので、このあたりは編者の方や、今日は出版社の方がいらっしゃるかと思うので聞いてみたいなと思いました。

我々の章のコメント返しに入りますけれど、おそらく鹿野さんと私とでは、微妙に考えていることもちがっているなかでの共同作業だというふうに認識しております。私自身がこの論文を書いて、いつもの論文と違うなと思ったのは、仮想敵が簡単につくられて危険だとちょっと自己反省をいたしました。というのは、この本のこの章の仮想敵はジェントリフィケーションになっているんですけれども、あたかもこれを言っておけば釜ヶ崎と釜ヶ崎の周辺的セクシュアリティを「救った」気になりかねないと、書いてて感じました。でも、通常の我々の研究はそうではなくて、性的マイノリティのコミュニティのなかでのポリティクスを描く論文を最近書きましたが、このときには仮想敵とか安易にどちらかに立つことができないわけです。そのなかでどうするかということに非常に時間を割くわけですけれど、今回の章についてはジェントリフィケーションが仮想敵になってしまっているので、これはどこまでも研究者が安全な場にいるような、研究者が批判をするための繭のなかにいるような気はしていました。ただ、鹿野さんと私の立場性の違いは、鹿野さんが大阪でフィールドをもってそこでゲイタウンの有様を歴史的に言及しているということなので、大阪の状況を見ていると、やはりジェントリフィケーションという言葉は、これまでも言われ続けていたかもしれないけれど言わなければならないし、性の問題が漂白されていた、あるいは、性の問題が言われるときも、異性愛の枠組みのなかでしか言われてこなかつた事情があつたかもしれません。その辺は、鹿野さんと私のリアリティは少し違うのかもしれません。

7 小田切建太郎

まず、本来小泉先生とあまり関係のない私を論集に入れてくださった編者のお二人、小西さんと河原さんにお礼を言いたいと思います。ありがとうございます。

ということで、先ほどの小泉先生のご報告に応答するという形で、先生の報告の趣旨を理解しているかは若干不安なところではありますが、正確な応答というよりは、報告に接して触発されて私が考えたことをお話しさせていただければと思います。今回私もひきこもりについて書かせていただいたなか、先ほど石田さんがおっしゃっていたように、研究者の立場が安全地帯に置かれているのかいないのか、そもそも対象となる関係が切れてしまっているのではないかということをいろんな形で考えてきました。

いわゆる当事者研究を研究する研究者という人たちを見ていても、若干どこに立っているのかなということを疑問に思うこともなかったわけではないです。たとえば、今回、小泉先生が言及されていた石川良子さんの『ひきこもりの〈ゴール〉』において、「働くことはもちろん、他者と関わることから難しくなっている人に対して、私たちは一体どう向き合えばいいのだろうか」¹ということが書いてあるのですが、「私たち」とは誰なのか、ということが若干気になるわけですね。石川さんの図式だとひきこもり当事者がいて、社会がひきこもりを悪魔化してしまうという関係が一方にあって、「私たち」というのがひきこもり当事者でもなければ、悪魔化する社会でもないという棚上げされた位置にどうしても立ってしまう。というかそもそも、私たちという立ち位置が見えてこないということがあるような気がするんですね。やり方としてというか、石川さんたちも含む「私たち」、あるいは僕も含む「私たち」というものは悪魔化あるいは所有することに加担しているはずなのに、一方では悪魔化する社会を批判するために「私たち」という言い方で棚上げしてしまう。たぶん、石川さん、あるいは、私というのは、どう接すればいいのかという問題の当事者であるはずなんですね。だから、ひきこもり当事者研究ではなく、ひきこもり当事者研究研究の研究者の当事者研究みたいなものの可能性がどこかにあるはずなのに、それが見えてこないのではないかという気がするのです。

だからといって、研究者が社会悪魔化するのでも、当事者を悪魔化するのでもなく、自分自身を悪魔化しろと言っているという話ではなく、そういうことをしてもあまり意味はないのではないかなと思っています。じゃあ、どうすればいいかということを考えたのですが、いわゆるべてるの家の当事者研究の要素として、問題を自分から切り離すというのがありますよね。ということも理性的人間もしていく、研究者もしていくという方法があるのかないのか、つまり、人間は言葉で何かを所有するというとき、その言葉でというのは手段なのか場所なのかよくわかりませんが。手段として見るなら人間が言葉を所有しているという話で、場所ととるなら人間が言葉に所有されているという、なんかまあ、ハイデガーっぽくなって申し訳ないのですが、このようなところから何か考えられるのではないかという印

¹ 同書、226 頁。

象を持ちました。

8 山本由美子

小泉先生への応答になっているかは甚だ不十分と思っていますけれども、私なりの考え方とか、小泉先生に触発されて考えたことを述べたいと思います。狂気や狂人について小泉先生のおっしゃったことを整理します。整理というか、私が思ったことを述べますと、〈健全に病むこと〉と、〈不健全に病むこと〉のあわいの哲学なのかなと思います。第一に、病みそのもの、あるいは健全不健全なるものの境界、その定義や境界はひどく恣意的でありながら、ひとりの生身の身体においては明瞭でも固定されたものではなくて常に流動的であるということ、第二に、そうした潮境のような場や動きが実は誰にもあって、そこで常に起り続けている病みや狂いとの邂逅や接続や生成をみずからの言葉でみずからに記述すること、第三に、私の論考（9章）に引きつけていうならば、みずからが動的編成してみることによってのみ、みずからの狂気を維持できるのであり、「狂気な倫理」を志向するのであれば、その意味や意義をアカデミーの外部でこそ思考してみると、これらが重要なのではなかとを考えました。

また、別の視点から述べてみると、いわゆる常識人、正常人と読み替え可能ですがれども、常識人は自分が狂っていないと思っていることが狂っているわけです。他方、狂人は自分が狂っているとはそもそも思っていないはずなんです。ならば、病み狂っていると自覚するこの私は、少なくとも常識人ではないわけで、非常識人上等ということになります。ところで、フーコーは、「別の傾向」、すなわち、「狂っていないこと」の狂い、すなわち、正気ですね、要するに、この正気人間たちの共謀がしでかす狂人の収容・監禁、フーコーはそれを問えと私たちに残したのだと、小泉先生はそうおっしゃった、そのように理解しました。狂人しか研究していない、いわゆる正気人間は研究の対象とされていないのではないかと、そのような指摘があったと理解しました。そして、西倉のいう「ヴァルネラブルに」なる／することですけれども、小泉先生がおっしゃったように、己の位置とか優位性をヴァルネラブルにすることなど起きているのかという問い合わせについてですけれど、そのようなことは起こっていないし、むしろ研究者は自分をヴァルネラブルにすることを極めて恐れているのではないかと私は感じています。とはいえ、人間というものがまだ、波打ち際の砂に書いた文字のごとく消え去っていないように、「弁証法的人間」というものも、まだ完全に死滅したわけではないと考えたいと思います。

さらに、これらを受けて小泉先生の問い合わせから引き出せる論点は、研究者が他者を対象化し、その語りを記録することによって、多かれ少なかれ実験台にして業績を得ているということは自覚される必要があるのではないか、あるいは、研究者たちがいわゆる狂人たちの物言いを代弁しているというふうに考えることの傲慢さが自覚される必要があるのではないか、そのように、自戒を込めてですけれど受け止めました。

9 柏崎郁子

みなさん、狂人という言葉と狂気という言葉を、言葉の語義通りにとらえていらっしゃるんですけど、小泉先生のコメントを読んで、狂人、狂気という言葉をメタファーとしてとらえられるのではないかと理解しました。私は10章を書いているんですけど、その章で言うならば、認知や知的あるいは意識に障害がある人たちの生命の良さについてある程度何か書けることがあるとするならば、それは私が生きていて意識があって言葉を発することができるから書けるのであって、私は幸運だということ。看護においては、私は患者ではなくて健康であるから看護ができるということ。そういうことだと読むこともできるかなというふうに理解しました。

私は、自分の論文で恐れ多くも小泉先生の『兵士デカルト』を引用しているからには、これに触れる責務があると感じてコメントさせていただきます。特に『兵士デカルト』第三章です。

狂いが生じているように見える人間に遭遇したことがある。あるいは、知り合いの人間に狂いが生じたように見えたことがある。あるいは、知り合いの人間と私の間に狂いが生じたように見えたことがある。しかしそれでも私に狂いが生じたと私には思われなかつた。私はそんな安心感を廃棄したいと望んだし、それを批判して否定する責務があると考えたが、それでも私は幸運であったと語るべきだと思い始めている。〔もっと読みたいが時間の関係で中略〕このような論点にデカルトの懐疑は触れている。（小泉 1995: 103-4）

つまり、今回小泉先生が提示された「弁証法的人間」になりえない研究者という在りようについて、『兵士デカルト』で既に同じ課題が突き付けられていましたし、そして現在もそうであるということをあらためて思いました。たとえば狂人を抑圧し管理する権力を糾弾し、そして狂人を肯定し擁護しかれらの言葉を拾いあげ、そうして研究者はある種の「安心」を得ているのではないかという疑念。小泉先生のコメントにおいては、「二項対立で物を考えたり生き方を選んだりする必要はなくなった」ようであるということをこそ「落ち着かない」と言っているわけです。

これに対して『兵士デカルト』では、「私は幸運であると語るべきだ」と言っています。つまり、物を書いている自分は狂人ではありえないのあって、ということは、狂人に対して二項対立でよいのあって、そう語ることが倫理的であるという構えを示しているように読みます。フーコーがそうであり、デカルトがそうであったと。『兵士デカルト』第三章の終わりのところで、炉部屋における孤独な闘い、炉部屋の思考では、どうあがいても「あのアムステルダムの詩人に遭遇することはないからである」(160) としめられています。アムステルダムの詩人とは自分のお尻がガラス製だと信じて破裂を恐れていた人ですが、そのような実存在に触れることなしに「像」をもとに思考するだけでその「像」に依存する思

考は「品位を欠いている」(160) というわけです。だからこそデカルトは、そのような炉部屋の思考を最後に自ら笑い飛ばしているというのです。

したがって自らの正気を疑わない人に「お前は何様か」と切っ先を突き付けることは大事でそうするしかないとも思われるのですが、それだけでなく、自身の炉部屋の思考に対しても結局は一笑に値するものとして排除するくらいの気持ち、あるいは少なくとも「落ち着かなさ」を感じる必要が常にあるということかなと理解していく、これが今回書かれていたプレシアドがいう自分自身を脱アイデンティティ化したいという欲望を感じるということかなと理解して、少なくともそうありたいと思っています、と申し開きしておきます。

10 北島加奈子

「狂気について書いたり考えたりする知識人や学者や研究者たち」とは「弁証法的人間」(フーコー『狂気の歴史』)のことである。だが、この「弁証法的人間」は、のちにフーコー自身によって『死んだ』と宣言される。では「狂気について書いたり考えたりする理性的人間」は、どうなるのか。

プレシアドの言う「あなたがたの女らしさや男らしさは、仮定され防衛されたものであって、それらは私のそれと同様に製作されたものです。この製作の糸車がまだご自身のなかで回っていることを感じ取」るのは、理性的人間(研究者や知識人)ということだろう。「正気の正常なマジョリティ」が「自分を脱・アイデンティティ化したいという欲望を感じる」ようになるには、何がどうなればよいのか(小泉先生の問い合わせ)。

先生の問い合わせに対しては答えられないのですが、コメントを読んでいて思ったことがあります。タイトルと引用部分を読む限り、プレシアドは何らかのマイノリティに属するのだと推測できます。そして、プレシアドにもその自覚があると読みます。だから「控えめな告発」が行われるのです。ところで、私は、私自身は「正気の正常なマジョリティ」に属するのでしょうか。研究者(アカデミー)の一員だという点ではそうなのでしょうが、それよりも先に(アприオリに)存在するとされるもの(たとえば、車椅子ユーザーであるという外見)によって「障害者」であることが先立つてくる時があります。そのような時は「一方が他方を対象として書くという営み」において、対象になってきた/されてきた側に立つのです。

他方で、研究者として論文を書く際は、その主題が何であれ、何かあるいは誰かを対象化しています。障害者でさえも対象化し、そうしてものを書くことで「おのれの存在論的安心を得ている」わけです。一般的には、障害者は「正気の正常なマジョリティ」とは見なされません。“狂気の異常なマイノリティ”だと思われています。私自身は存在論的レベルで言えば、障害者というアイデンティティを持っていません。一方で私には、私の身体には、ある意味典型的な障害者のサイン(インペアメント)が存在しています。その意味で、私は狂

人です。その実体的な狂人が、時にアカデミーの一員、すなわち「正気の正常なマジョリティ」として研究し、書き物をするのです。そこでは正気と狂気の別が、あるいは正常人と狂人の区別がなくなっています。正常人と狂人の区別がなくなる、まさにその時に別種の（肯定的な）「狂気」が生まれるのではないかと、考えるようになりました。

11 笹谷絵里

狂人か狂人ではないかというところは、私は見方や立場で違ってくるのではないかと考えます。小泉先生への返答としては、研究者は「正気」で「正常」な人たちであるという話がありました。それに対して、今から述べることは、ここにいらっしゃる方全員を敵に回してしまうかもしれません、今日のフォーラムのパンフレットをいただいたので、このフォーラムがあることを勤務先の授業で受講する学生に言いました。そのなかで、「先生も発表するので、もしよかつたら Zoom でも見られるから申し込んでね」と言いました。どんな内容かと聞かれ「狂気について話し合う会なんだよ」と言いました。「何時から？」と聞かれ「10 時から 17 時半まで大阪大学であって、大阪大学の学生さんも来るし、偉い先生もいっぱい来るよ」と答えました。

そこで「え？」と言われました。「わざわざ祝日に、朝から晩まで？」と。さらに、狂気とは何かと質問されたので、語弊あるかもしれないけれど、簡単にいうと「ちょっと頭がおかしいとか狂っている」という意味だよと答えました。すると、「狂ったことを一日話し合うっておかしくない？先生大丈夫？」と心配されました。誰か興味ないか聞いてみると「そんなの普通バイトするでしょ。阪大の人たちは何してるの？」と言われました。

私もこの会はとても意義があるので、楽しみにもしていました。今日ここにいる私たちは、自分たちが「正気」な人間で、正常な話合いをしていると思っているかもしれません。ですが、先週そのように言われました。

見方によっては、ここにいる人たちは全員「正常」で「狂気」についてまじめに語り合っていると思っていると思います。けれど、一般的には、研究者ではない多くの人にとっては、これは変な集まりだと感じてしまう。人によっては、ここは「狂気」な人たちが「狂気」について語り合っているという変なものに見えてしまうのではないかと思います。そのためえ、研究者が決して、「正気」で「正常」なわけではないのではないかと考えます。

(こにし・まりこ、たかぎ・みほ、さだおか・みのぶ、かわはら・あずみ、
しかの・よしゆき、いしだ・ひとし、おたぎり・けんたろう、やまもと・ゆみこ、
かしわざき・いくこ、きたじま・かなこ、ささたに・えり)